

研究主題

自分の思いをのびのびと表現できる子どもの育成

- 国語科における教師の発問・子どもへのはたらきかけの工夫を通して -

第6学年\*組 国語科学習指導案

場 所 6年教室

指導者 穂積弘行

1 単元名 人物の生き方を考えよう 「海のいのち」

2 目 標

主体的に物語を読んだり，考えたことを自分の言葉で表現したりしようとする。

登場人物の心情や場面，登場人物の相互関係について叙述を基に読み取り，物語の主題や優れた叙述について自分の考えをまとめることができる。

まとめた考えを発表し合い，自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

場面の様子や優れた心情表現，象徴表現などに着目し，言葉の使い方について理解することができる。

3 単元について

(1) 教材観

本単元は，作品から読み取ったことを基にして自分の考えをもち，選んだ発表方法でその考えを紹介し合い，自他の感じ方の違いや共通点に気付きながら自分の読みを深めていくことをねらいとしている。これは，新学習指導要領の第5学年及び第6学年「C読むこと」のアイエオに基づき，特に，内容(1)エ「登場人物の心情や場面，登場人物の相互関係について叙述をもとに読み取り，主題や優れた叙述について自分の考えをまとめること」，オ「本や文章を読んで考えたことを発表し合い，自分の考えを広げたり深めたりすること」を重視している単元である。

教材文の「海のいのち」は，主人公「太一」が海に生きる「おとう」や「与吉じいさ」等とのかわりを通して成長していく姿を描いた物語である。自然への畏敬の念や命の連鎖を読み手に感じさせる作品であり，会話文や情景描写などを基に，主題や意図を考えさせるのに適している。この教材には，直接的に心情を描写した叙述は少ない。そのため，会話文や動作の描写，情景描写などを基に心情を読み取らせていくことになる。そこで，会話文・情景の比較や直喩・暗喩，色を表す言葉などに着目して読み進めていく必要がある。

他の登場人物とのかわりを通して，人としてたくましく成長していく主人公の姿や作品にちりばめられた特徴的な表現は，児童が根拠を基に自分の考えをもちたり，友達の考えを聞き，自分の読みを深めたりするのに適した教材である。

(2) 児童の実態(男\*人 女\*人 計\*人)

項 目	項 目
A 学力診断テストの結果(正答数) *月*日実施(*人)	B 単元テストの結果(正答数) (*人)
ア 文脈に即して様子を読み取る力 *人	イ 文脈に即して心情を読み取る力 *人
イ 文脈に即して心情を読み取る力 *人	・物語文「風切るつばさ」(4月) *人
ウ 文脈に即して内容を読み取る力 *人	・物語文「ヒロシマのうた」(6月) *人
	・物語文「桃花片」(9月) *人

児童は，4年生の教材「夏のわすれもの」，5年生の教材「ちかい」，6年生の「ヒロシマのうた」の学習を通して，物語の盛り上がりについて考えたり，出来事に注意して最も強く心に残ったことを短い文で表したりする学習をしてきた。児童は読書が好きで，毎回積極的に取り組んでいるが表現力が乏しいのが現状である。学力診断テストの結果をみても，内容や心情を読み取る力がついてきている。また，文脈に即して様子を読み取ることができているのは1人だが，答え方を習得していないだけで様子については大部分の児童がとらえている。しかし，自分の思いを伝えたい場合などは，自分の言葉で書けずに思いつきで書いてしまい，順序よく整理して書くということなどができない書く力の弱い児童がみられる。そのため，読んだ後，登場人物に対して手紙を書く，決められた字数であらすじを書く作業などを随時取り入れている。

(3) 指導観（研究主題に迫るために）

「海のいのち」の学習は、主題に迫ることが、本単元の学習における重要な柱になる。この作品は、視点の置き方によって二つの主題を想定することができる。太一の一生に着目すれば「たくましく成長していく一人の人間の成長」という主題が想定できるし、「海のめぐみ」や「千びきに一びき」に象徴される父や与吉じいさ、さらには太一の行動や考え方に着目すれば、「人間と自然との共生」という主題が想定できる。どちらの主題にも児童が気付くことができるような指導を行っていききたい。

これらの主題に迫るためには、人物の気持ちの移り変わりに注目させたいが、本作品には直接心情を描写した場面は少ない。そこで、会話文や行動に着目させながら、小グループや学級全体での話し合いによってそれぞれの人物の気持ちを理由付けで考えさせ、交流・共有することで、確かな読む力を育てたい。そのためには、辞書の活用や教材文へのサイドラインなどの自由な書き込みを通して、一人一人に細やかな読みをさせていきたい。本時の、太一の生き方から主題に迫る学習では、「本当の一人前の漁師」という言葉を意識させ、そこから太一と与吉じいさや父を対比したり、類比したりして、意見を交流しながら大切に扱っていききたい。話し手は自分の考えや意図が相手に伝わるように話し、それに対して聞き手は、話し手の意図を考えながら聞き、疑問に感じたことを質問したり、自分の意見と比べたりするなどの活動を通して、お互いに思いや考えを深めていくようにしていきたい。

なお、作品には、自然とともに生きる漁師の姿が描かれている。消費社会と言われる現在と対比させ、必要な分だけあれば生きていけるという作者のメッセージにも気付かせたい。

4 指導と評価の計画（9時間扱い）

次時	主な学習活動	関	読	言	評価規準
一	1				・教材文を読むことに興味をもち、物語を読んだ感想をまとめようとしている。（観察、発表）
	2				・物語の展開において重要な言葉や優れた表現や書き表し方に着目し、その効果について気付きながら読む。（ノート）
二	1				・父の人物像や太一の思いを叙述に即して読み取り、まとめている。（発表、ノート）
	2				・与吉じいさの人物像や太一の思いを叙述に即して読み取り、まとめている。（発表、ノート）
	3 4				・物語の構成における「転」の部分から、太一の心情の変化を読み取り、クライマックス部分をとらえている。（発表、ノート）
	本時				・登場人物の言動と太一の成長の姿をつなげながら読み取り、「海のいのち」の主題について、自分なりに根拠を明確にして考えている。（発表、ノート）
三	1				・いのちシリーズの作品を読み、自分の読みを広げたり深めたりしている。（観察）
	2				・いのちシリーズの題名について、自分の考えを自分の言葉で書いている。（観察、ノート）



